

〔博士論文概要〕

近代における武士道思想に関する研究－思想的連続性と武道との関連について－

令和4年度

堀川 峻

筑波大学大学院人間総合科学学術院体育科学学位プログラム

本論文では、これまで「創出された伝統」としての立場から多くの考察がなされてきた近代の武士道思想について、そこにみられる近世以前からの思想的連続性を紐解き、さらに近代武士道の思想的連続性と武道との関連を解き明かすことで、武道の伝統性の一端を解明することを目的とした。まず、近世以前の武士道には「武士道」と「士道」の2つの流れが存在し、「士道」が近世武士の思想を主導したことが知られている。本研究では、まず近世期の「武士道」に特徴的であった武的・戦闘的な思想への回帰を重視する思想、「士道」に特徴的であった倫理・道徳的な理想の実現を標榜する思想が、いかに近代武士道論に受け継がれているのかについて、関連するキーワードを取り上げながら考察を行った。さらに近世期の武士の思想を主導した「士道」が、近世後期から近代武士道へと受け継がれる思想的変遷について、「士道」の系譜に位置づけられる後期水戸学の影響に着目しながら考察した。その上で、近代武士道にみられる思想的連続性と武道との関連については、それまで取り上げた各武士道論の中で武道がいかに位置づけられているのかを探ることで、近代武士道にみられる思想的連続性と武道がいかに関連性を持つのかについて考察を行った。

第一章では、明治27年以降に始まる明治武士道隆盛以前に、重野安繹・松本愛重・内藤耻叟という3名の史学者が著した武士道論を、「武士道の淵源」と「武士道と倫理・道徳」、大きく2つの視点から考察した。「武士道の淵源」、つまり近世以前のいかなる思想に武士道の端緒をみて、そこからどのような部分を受け継ごうとしたのかについては、3者に共通して、武士道の語が出てくる以前から存在していた思想を継承しようとしていたことがわかり、そこでは武士道と天皇とのつながりが強調されていた。重野は、武士道を建国当初から既に存在していた思想として捉え、その淵源を天皇に仕えた物部・大伴氏の「武功」に求めていた。松本は、重野と同じく太古の時代や大和政権時代にまで遡り、「尚武の気風」を武士道の淵源として論じていた。これまで重野が「おそらく最も初期に」、「天皇中心の国家であった時代」にまで遡り武士道の淵源を論じたとされてきたが、その前年にあたる松本の論稿にもそのような論調が見て取れた。内藤は南北朝時代に南朝を守護した武士の「忠義

勤王」の思想に武士道の淵源をみており、水戸学の「南朝正統論」に基づく姿勢がみられた。そこから重野や松本が太古の時代や神話の中に淵源を求めて武士道論を著す前に、近世期から続く水戸学の歴史認識に基づく形でその淵源を語った武士道論も存在していたことが窺えた。「武士道と倫理・道徳」に関して、重野・松本は武士道論の中で「倫理」や「道徳」の語を用いることはなかった。重野らに代表される考証史学派は、歴史研究と倫理・道徳教育の接近が史実を歪めることにつながるとして、その思潮に批判的な見解を持っており、武士道論もあくまで歴史の実証に主眼が置かれていた。内藤は「倫理」や「倫理綱常」の語を用いて武士道を語っていた。明治 20 年代は、考証史学派と対立する国文学派の歴史研究が倫理・道徳教育と強く結びついていた時期であり、内藤がその中心的な人物の 1 人であったことも倫理・道徳として武士道を語った背景として考えられた。さらに重野・松本の武士道論では、武的・戦闘的な思想の重要性が説かれており、近世「武士道」の思想的特徴が受け継がれていた。また、後期水戸学派出身の内藤は、武的・戦闘的な一面よりも、忠義を尽くす思想を受け継ごうとしており、内藤が「士道」に特徴的であった倫理・道徳的な思想を近代へと受け継ごうとしていたことが読み取れた。また近世後期に「士道」の系譜にあった後期水戸学の思想が、内藤によって近代武士道論へとつながっていく思想的な変遷も確認された。

第二章では、明治武士道隆盛期における井上哲次郎の武士道論について検討した。近世以前からいかなる思想を受け継ごうとしたのかについて、井上は古代から続いてきた「精神」を近代以降の道徳へと受け継ぐべきであるとしていた。先行研究では、井上が山鹿素行を取り上げたことについて、武士道を学問として体系化・制度化し、実践道徳とは異なる方向づけを行ったとの指摘がなされてきたが、一方で彼は山鹿素行によって示されていた、武士道を「実行」するための「決心」を今後も受け継ぐべき「精神」として第一に挙げており、その点において先行研究とは異なる一面が確認された。また「士道」からの思想的変遷に関しては、井上が武士道と当時の倫理・道徳を結びつける「士道」的な論調をとっていたことから、そのような思想がいかに形成されたのかについて、史学に関する著述に焦点を当てて考察を行った。井上の史学に関する見解については、先行研究において、国文学派と同系統に位置づけられる「歴史を道徳的に見る」立場をとっていたこと、考証史学派と同系統である「史実を忠実に世に伝える」立場と対立していたことが既に指摘されてきたが、明治 24 年から 25 年までの記述においてはそのような見解は全く見られなかった。また井上が明治 26 年の論稿の中で考証史学派の久米邦武と論争を行っている場面がみられ、対立する様子が具体的に明らかとなった。明治 32 年～明治 34 年の史学に関する著述では、史学を当時の倫理・道徳教育へ応用する姿勢に変化しており、「歴史を道徳的に見る」立場が明確に現れていた。ここから、井上が明治 34 年から武士道を近代以降の道徳の土台として語ったことも、このように歴史を倫理・道徳教育に応用しようとする思想が徐々に明確になっていったことが背景となっていると考えられた。さらに井上は、山鹿素行を取り上げる際に「死節」について説いており、近世「武士道」にみられる死への決心を受け継ごうとしていた。さら

に近世以前に武士によって実践されてきた倫理・道徳として武士道を語る部分もみられ、「士道」でみられた倫理・道徳的な実践性を受け継ごうとしていたこともわかった。ここから、井上が語る武士道の「実行」の精神は、武的・戦闘的な思想と倫理・道徳的な思想のどちらにも通ずるものであるといえ、その点において「武士道」と「士道」に共通して含まれる「実践性」を近代へと継承しようとしていたことがわかった。その上で、井上が武士道を近代の倫理・道徳と結びつけて語った点に関しては、改めて「士道」と類似した思想が窺え、また井上が近世期の水戸学の思想を認識していたことも踏まえると、第一章でみた後期水戸学から内藤の近代武士道論へと続く「士道」思想の系譜に、井上の武士道論も位置づくものであると考えられた。

第三章では、これまでみてきた4者の武士道論に加えて、「歴史を道徳的に見る」国文学派の中心人物であった池辺義象の武士道論をあわせて、近代武士道にみられる思想的連続性と武道との関連を検討した。そこでは、各著者の立場の違いによって異なる関連性がみられた。さらに池辺や井上は、「歴史を道徳的に見る」立場から、武道と武士道の関連について説いており、その点からも第一章・第二章で明らかにした思想的連続性との関連が明らかとなった。

以上から、近代武士道にみられる思想的連続性に関しては、近世期の「武士道」と「士道」、それぞれの内容や特徴、また両者に共通する「実践性」が近代武士道へと継承されており、さらに「士道」は、後期水戸学からの影響を受けつつ近代武士道へと受け継がれていた。そして武道との関連については、近代における武道と武士道の関連性が近世期からの思想的連続性を背景として形成されていたことが示唆された。つまり、近代武士道は、先学が指摘するように、単に近代以降に「創出」・「発明」されたというのではなく、その底流に近世期からの思想が脈々と受け継がれ、かつ武道と結びつきつつ、特有の伝統性を有するものとして発展、展開していたことが明らかとなった。